

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第141号 2026年9月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 学生の歴史を研究する ①大学院進学まで	長谷坂 大樹	2
成城高等学校同窓会会員の消息集 — 成城高等学校同窓会編『会誌』1934年所収 —	谷本 宗生	4
女子教育史散策・昭和戦時下編(90) 梅花学園の場合I	長本 裕子	7
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(29):『震災後の東京 学校遊学案内 附・苦学生の就職案内』(大正13年)(1)	吉野 剛弘	15
七年制高等学校における尋常科・高等科間の教育の相違 :一学校空間での中等教育から高等教育への接続について (4)府立高等学校の事例③	猿田 怜央	21
刊行要項(2026年2月15日現在)		26
短評・文献紹介 アニメ『女子高生の無駄づかい』第7話の「愛せるおバカキャ ラ・シーン」について(谷本宗生)、古書店入手の八尾中学校史料(1904 年)について(富岡勝)		27
会員消息 谷本宗生 猿田怜央 山本剛 富岡勝		29

コラム
学生の歴史を研究する
①大学院進学まで

はせさか だいき
長谷坂 大樹
(東京大学大学院教育学研究科
教育学研究員)

私は学生に関する歴史研究を行っている。修士課程、博士課程への進学は、大学職員として働きはじめてからのことで、六年半の社会人院生生活を経て、二〇二六年七月に博士の学位を取得した。この機会にどのように研究をはじめ、

継続してきたのかを整理したい。本号ではまず大学院進学に至るまでを記す。

1. 学問的関心の芽生え

私は慶應義塾大学文学部の日本史学専攻で学部生時代を過ごした。当初は漠然と日本近代史の研究がしたいと考えていたが、学部三年生のとき、柄越祥子先生（慶應義塾福澤研究センター）の日本史演習を履修したことをきっかけに、大学の歴史を研究したいと考えるようになった。この演習の履修者は私一人だけであり、毎週、戦前期の学生新聞を読んで柄越先生と議論する機会を得たのだ。また当時（二〇一五年）は戦後七〇年であったこともあり、各大学で「大学と戦争」を取り上げた展示が行われていた。慶應、早稲田、明治、立教で開かれた展示を実際に見に行くうちに、戦前期の学生がどのような教育のもとで、いかなる生活を行ってきたのかに強い関心を抱くようになった。

学部時代の指導教員は、キリシタン史を専門とされる浅見雅一先生（慶應義塾大学）だったが、戦前期の大学を研究したいという私に、研究者を紹介し、文献をくださるなど大変気にかけていただいた。また教職課程で故吉村日出東先生（帝京科学大学）の社会科教育史、大学史の授業を受けたことも刺激になった。当時の私は、教育の歴史を研究対象

とする学問があるということさえ知らなかった。吉村先生は、明治大学博物館の大学史展示室、刑事部門の見学なども取り入れながら教育の歴史を研究することの面白さを示してくださった。そして卒業論文では、戦前期に慶應義塾長を務めた小泉信三と教育を取り扱った。しかし時間的な制約も大きく、不完全燃焼のまま卒業を迎えてしまった。

2. 大学院進学へ

学部卒業後、大学という場所に残りたいと考え、大学職員として就職したが、どうしても研究を続けたいという思いが消えることはなかった。そして職員を続けるうちに、「大学」そのものに対する関心も強くなっていった。そうしたときに知ったのが、東京大学大学院教育学研究科の大学経営・政策コースである。高等教育を研究する大学院であり、歴史的な研究対象を設定してもよいという。大学院という場所で、今度こそ本格的に大学を対象とする歴史研究をしてみたいと考え、進学を目指すことにした。

***コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

成城高等学校同窓会会員らの消息集

— 成城高等学校同窓会編『会誌』1934年所収 —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

昨日、ネット古書店である泰成堂書店さんから、成城高等学校同窓会編『会誌』1934年12月を、安価に入手することができた。この同窓会誌の目次をみると、会員らによる投稿原稿、消息雑報、会員名簿、編集後記といった構成である。

なかでも、成城高等学校の卒業生である同窓会員らの消息集は、率直な会員らの近況などを示していて、たいへん興味深いものだと思う。そのうち、幾つかを以下に挙げ、抜粋紹介してみよう。なお会誌では、会員(卒業生)らの実名が明記されているが、ここで紹介する谷本のほうで名前をイニシャル表記とした。

消息集 第一回卒業生(昭和四年三月)

文科甲類 M.J(海軍省)

非常時だ、軍縮だ、何だかんだと、[と]てもうるさいことでござる。

理科甲類 T.J(東京帝国大学大学院)

東京帝大理学部大学院で数学を勉強して居ります。

消息集 第二回卒業生(昭和五年三月)

文科甲類 N.T(東京帝国大学大学院)

現在わたくし大学院に居ります。国学者及び儒者の論攷を中心とする近世日本経済の研究といふのですが、自分ながらどうかと思つています。

文科甲類 N.Y(三井生命)

大学を出て二度目の秋が意外に早く寒々とやつて来ました。商売は三井生命の外交、楽ではありません。皆さん保険の御用は、ナニトゾ小生へ御願ひします。

大学生には高等学校の生徒が、大学を出れば大学生が、他愛のないものに見える。同様のことをあの世で考へることが出来たら、何と嬉しいことだらう。

文科乙類 I.T(株式会社三越)

御上京の際は、是非三越まで買物にでもお立寄り下さい。夜位いはつき合ひますから。商人の卵としてスタートして間もない今日、学校時代にもつと勉強しておけばよかつたと後悔して居ります。

理科甲類 F.H(日本放送協会技術部)

昨年の春九州帝大電気工学科を卒業致し、日本放送協会技術局に只今勤務致して居ります。仕事の範囲が広いので絶えず同窓諸兄の御世話になつております。今後共宜敷く。

消息集 第三回卒業生(昭和六年三月)

文科甲類 T.Y(松田農園)

拝啓小生毎日メロンを食べながら元気に働いて居ります。

文科乙類 S.K(航空研究所)

漸く永い学生生活を了へて只今は航研で研究を続けて居ります。目下は暗室を用ひる実験を続けて居りますため一日中御天道さまのお顔を見ない日があり、丸でモグラもちみたやう。

理科甲類 G.Y(三菱商事)

小生本年東京工大卒業致し、三菱商事に勤務して居ります。毎日仕事のことのみ考へて居るので別に之と云つて感想ありません。兎に角学生時代が一番楽しいと思ひます。

理科乙類 Y.F(千葉医大)

健康です。今年の夏休は七月八日共に大学にて、内科外科の実習を致す予定。併し房総の暑熱に耐えられるかどうか？ 気分を尊重して七月早々千葉を離れるかもしれません。本日は六月末日なのですが、いやどうも暑いこと、体温調節には裸体が一番と裸で試験勉強。夏の試験は全く寿命がちぢまります。試験も余り暑かつたらば来学期廻しとします。まあまあ皆さん、互に暑気あたりをせんように。

さらに、旧職員（退職教職員）の名簿欄で、私・谷本が見知った人物の名前を偶然にみつけた。のちに、大東文化大学第四代学長をつとめる佐伯梅友（国語学者）である。略年譜によれば、佐伯は、京都帝国大学を卒業した1928年から3年間ほど、成城高等学校教授をつとめた。なお佐伯の弁によると、「心配した[京都帝大]卒業論文もどうやら書けて、さて卒業後の身のふり方を考えるようになったころに、郷里[埼玉県小川町]で養父が病気になり、あまり遠い所に就職することができなくなりました。幸い東京の成城高等学校で採用してくれて、昭和三年四月から教授として講義をすることになりました。[中略]楽しく過ごしましたが、とにかく卒業したてで、文科二年で源氏物語の雨夜の品定めなどというのは、自分ながら思い出すのも冷汗という状態でした。それでも不思議に自信喪失ということにならず、下調べに時間を使うことが楽しい気持ちでした」（「自己を語る」所収）と、成城高校での教員生活を率直に懐かしく振り返っている。

女子教育史散策・昭和戦時下編(90)

梅花学園の場合I

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

明治11(1878)年1月、当時の大阪西区土佐堀裏町十番地にあった民家を借り、澤山保羅^{ぼうれう}、成瀬仁蔵^{なるいさ}ほか数名の先覚者たちが中心となって梅花女学校を開設した。当時はまだ封建思想が根強く、女子教育など思いもよらない時代であったが、社会改革の第一歩として、次代の子女の教育を担うべき女子に、愛の教育の必要性を痛感し、キリスト教主義に基づく教育を始めた。大阪における最初の女学校であり、現在の梅花女子大学、梅花中学校・梅花高等学校の前身である。『梅花学園九十年小史』『梅花学園百十年史』などを参考にして、まずは草創期の様子を概略しよう。

梅本町公会と浪花公会

明治5(1872)年秋、キリスト教伝道を目的に、アメリカン・ボード(米国伝道委員会)から派遣された宣教師O・H・ギュリック夫妻が、大阪川口居留地に入った。ついでM・L・ゴルドン夫妻も川口居留地に入り、伝道開始の時を待った。翌6年2月、切利支丹禁制の高札が撤廃されたのを機に、ギュリック、ゴルドンらは塾を開いた。平均50名の出席を得たが、大多数は英語の習得を目的としていた。しかし、その中から日曜礼拝に出席する者が出て、明治7(1874)年、5名がゴルドンより受洗し、横浜公会からの2名を加え、7名によって、大阪最初の教会が生まれた。所在地から梅本町公会(現大阪教会)と呼ばれた。

明治9(1876)年7月、アメリカン・ボードの大阪派遣宣教師A・H・アダムズは、梅本町公会員の医師松村矩明や薬剤師前神醇一らと共に、心斎橋筋高麗橋通角に病院と診療所を開設し、松村出張所^{みたてでこう}と称した。アダムズらは診療を行うだけでなく、キリスト教図書の閲覧や、安息日学校(日曜学校)を始

めた。同年秋にアメリカ留学から帰国した澤山は同所の通訳となり、タ礼拝等を開いて伝道活動を開始した。間もなく信仰者たちが教会設立を決意し、翌10年1月、浪花公会（現浪花教会）が誕生した。

設立式で宣教師たちが澤山に^{あんしゅれい}按手礼を行い、澤山は日本初の牧師となった。この教会は外国の援助を受けず、教会員によってのみ維持される日本初の自給教会となった。教会員各自が収入の十分の一を献金しようと約束した。

梅花女学校の誕生

梅本町、浪花の二つの公会は毎月親睦会を開いていた。明治10（1877）年10月の親睦会で、浪花教会員⁽¹⁾の小泉敦から自分たちの娘の教育の場として、女学校設立の必要性が発議された。討論の上賛成されたので、女学校委員をそれぞれの教会から4名ずつ選出した。女学校設立に向けて献金を募り、集まった30円余で土佐堀裏町十番地の長田作五郎宅を借りて、発足させた。

明治11（1878）年1月7日、信者の娘15名で開校式を行った。司会は澤山が執り行い、浪花教会員代表として成瀬が祝詞を述べた。澤山の女子教育観は、「人間は男女が互いに助け合って社会を作るように神によって創造されたのであり、男女が対等に神の創造の業につながるべき」⁽²⁾「女性も神の肢体として主体的に神に尽くすべきである」⁽³⁾というものであった。

同月18日、大阪府知事から認可された。初代校主は、大阪英学校（第三高等学校の前身）教員の小泉敦が兼任した。初代校主に小泉が就任したのは、1月7日付で提出された申請書を、大阪府知事渡辺昇が、校主澤山保羅ゆえに許可しなかったためと考えられる。キリスト教教育に対する抑圧であった。⁽⁴⁾

学校名は、梅本町教会と浪花教会の信者有志が開設に携わったことから、それぞれの教会名から一字をとって「梅花」と名付けられた。神戸の「神戸英和学校（神戸女学院）」や京都の「同志社女学校」など、他のミッションスクールが外国の手厚い補助の下に経営している中で、梅花は、両教会から選ばれた女学校委員会によって、自給独立の精神で運営された。たびたび経済的窮乏に陥ったが、教育面においては、米国外国伝道会社から宣教師派遣などの協力が得られた。

当初の教授課目は、英学、普通科、国書、音楽、倭洋裁縫など、正則中学としての内容であった。⁽⁵⁾ 当時大阪にあった女子の学校はほとんどが、修業年限の短い裁縫学校、習字学校であったので、梅花の教授課目は画期的であった。澤山は聖書を、小泉、田島藍水は国語、漢文を、成瀬は数科目を教え、宣教師M・E・グールディー、F・A・スティーブンスが英語を、H・H・レビットが音楽を担当した。

15名で始まった女学校は、5月末には31名となった。授業料は1ヵ月50銭で、最初から約6円の赤字を出したが、梅本町、浪花の両教会によって3円ずつ援助された。順調な滑り出しに見えたが、開校後間もなく土地・建物の所有者の破産により校舎を失うことになった。11年9月、北浜三丁目に、後には、浪花教会へ、続いて梅本町教会へと転々とする日々が続いた。ようやく翌12年秋、元長田邸を買い取り再び校舎とすることができた。土地購入はアメリカン・ボードによる寄付、建物の購入改築は日本人信徒の寄付と一株2銭の講を集めた。同年11月6日に行った開業式には約250人が集まった。新校舎移転後、13歳以下の生徒の寄宿舍入寮が許されるようになり、女学校に小学科が設けられた。

澤山保羅について

梅花女学校創立の中心人物である澤山は、嘉永5（1852）年3月、長州吉敷（現山口市吉敷）で生まれた。幼名は馬之進。父源之丞は吉敷毛利家に仕える下級武士で、生活は貧しかった。6歳のころ憲章館で四書五経、書道、武術、礼式などを学んだ。慶應2（1866）年、幕府軍による第二次長州征討のとき、14歳の馬之進は父とともに参戦し、良城隊第五小隊の鼓手として活動した。激しい戦闘の結果長州軍が勝利した。そのときの司令が内海豪助（忠勝）であった。

澤山は、明治3（1870）年ごろ、兵庫県大参事であった内海から、内海家に住みながら洋学を学ぶことを勧められて、神戸に出た。そして英語の勉強のため内海から紹介されて宣教師D・C・グリーンを訪ねた。グリーンは、アメリカン・ボードから日本に派遣された最初の宣教師である。やがて澤山は、グリーン宅の家庭礼拝に出席し、聖書を学ぶようになった。明治5（1872）年夏、20歳の澤山は渡米し、イリノイ州エバンストンに入った。グリーンの紹介で、グリーンの兄サミュエル・グリーン宅や姉のボーテル宅で世話になり、ノースウェスタン大学予科で学んだ。同年11月にエバンストン第一組合教会においてE・N・パッカード牧師より受洗した。

明治6（1873）年秋ごろにはパブリック・スクールに転校した。留学直後から健康を害し、同年12月、シカゴのマーシー病院に入院し、手術を受けた。結核と推定される。これが宿病となる。澤山の留学目的は、近代日本の軍事、経済的生活のための知識を得ることであった。しかし、宣教師H・H・レビットの訪問を受けて、澤山の信念に変化が生じた。レビットは明治6年、アメリカン・ボードから大阪に派遣されていたが、病気のために一時帰米（1874～1875年）していた。レビットは、日本の伝道は日本人が担うべきであると主張し、澤山に伝道者として帰国することを強く要望した。このレビットとの出会いが澤山の人生に新しい道を切り開くことになる。澤山はシカゴのギアレット

聖書学校で神学を学ぶことになった。明治8(1875)年、レビットは夫人とともに再び大阪に戻った。翌年、澤山は、名前を使徒パウロ(パウロ)と同じ「保羅」に変え、伝道者として同胞に福音を宣教するために帰国した。

澤山は、明治9(1876)年夏ごろ、横浜に上陸。一旦郷里に帰り、家族と再会し、大阪に戻った澤山を待ち受けていたのは、大阪権参事になっていた内海とレビットであった。内海は月給150円の政府役人になることを勧め、レビットは月給15円の伝道者の道を勧めた。澤山は伝道者の道を選んだ。

梅花女学校経営の危機

明治15(1882)年、校舎新築で借りた借金の返済を迫られ、梅花女学校は危機に陥った。他団体に譲渡しようとの声もあった。こうした中で、梅花の教育を評価した奈良県吉野の土倉庄三郎が娘と親戚の娘を入学させ、100円を寄付した。ところが、同年8月、唯一の専任教員として数科目を担当し、教務から雑務まで担っていた成瀬が辞表を提出した。外国や非キリスト教徒からの資金受け入れに反対したためである。学校は有力な教員を失った。成瀬は、澤山より6歳年下の同郷の士であった。ちなみに成瀬は、後に日本女子大学校創立(明治34年4月)に際して、この土倉氏はじめ政財界の有力者に協力を求めている。

土倉氏の寄付を受けてもまだ200円近い借金が残った。翌16年5月、田村初太郎は校長(明治12年8月就任)を辞任し、澤山が校長に就任した。同年9月に開かれた大阪(元梅本町)、浪花、天満、島の中の四教会の婦人信徒の親睦会で、澤山校長を助けて、梅花女学校の財政的援助をしようとする働きが再び教会側に盛り上がってきた。この会で女学校存廃の決着がつけられることになった。その様子を山岡(北住)はるかの手記(『創立六十年史』)からみてみよう。山岡は、明治16年7月、邦語科を卒業し、再び英学科に入学した生徒である。

又悲しいことが起りました。学校の維持がどうしても困難なので、廃校しようかとの一大問題なのです。…其の存廃についての相談会が天満教会で三晩つづいて開かれました。生徒の年長者は皆参りました。…皆神様にどうぞ此の学校がつぶれませんやうにと一生懸命泣いて祈って居りました。…いよいよ今夜こそは我々の愛する学校が存続するか、廃校となるか天下分目の時です。我々はかたづを呑んで聞いて居りました。到々沢山先生の御説が勝を得ました。学校はつぶれません。…嬉しいこと!天にも昇る心地でした。後略(『梅花学園九十年小史』34頁より)

澤山の熱弁が勝ち、女学校の存続が決定した。澤山はそれまでの教会立学校ではなく、キリスト教信者有志の新委員会が経営するクリスチャン・スクールとして女学校の存続を決めた。

澤山が決してまげなかった「自給独立」の精神について、明治14年5月、大阪で開催された宣教師会議で、澤山が演説した「日本の教会の自給」の一節に、

自給の原則というのは、全教会員にかかわる原則であり、これにたいしてはすべての人が同等の責任を負っています。銘々の人が各自の収入に応じて差し出す、というのが原則です。…貧しい人も金持ちも、収入の10分の一を必ず忘れずに差し出すこと、…教会のその他の出費にかんしては、信徒各自が毎日または毎週、この目的のために金を取り分けておき、毎月末には経費を割って、各自その能力に応じた出費を分担するのです。…この方法によって多くの慈善が果たされることになります。(なぜなら、女学校一校を支援するには、各人が日に二厘ずつ負担すればよいのです。)

(成瀬仁蔵『澤山保羅——現代日本のパウロ——』156～158頁より)とある。

明治17(1884)年5月、大阪地区の各教会員を集め、梅花女学校親睦会が行われた。澤山は病軀をおして熱心に信者たちに負債200円の消却を訴えた。200人余りの参加者はそれぞれ寄付を約束し、その額は170円にのぼった。この時のことを「福音」(5月14日号)は「…同夜の如き期せずして斯の如喜こばしき集会を得しハレワイフル(リヴァイヴアル・信仰復興の意)によりて生ぜしーの結果にして神に感謝すべきことなり…」⁽⁶⁾と報じている。また、おそらく同夜のことを指しているものと思われる記述がある。成瀬はその著書『澤山保羅——現代日本のポウロ——』(126頁)で、「…これが直ちに大きな関心呼んで、大きな会合となり、質問会までに発展した。この会合からもどった多くの人びとが、この場での自分たちの体験を他の人びとに語った。これは^{リバイバル}信仰復興の端緒であった。」と記している。

信徒の中には家財を売って約束の寄付をした者もいたという。しかし、この時の実際の入金は100円ほどで、翌18年4月、再び親睦会を開き、90円を集めて完済することができた。こうして経営の危機を乗り越えることができた。澤山への信頼、女学校への評価に絶大なものがあったことを示しているといえよう。

負債解消後、次第に評価を得て、多くの生徒が入学するようになり、明治17年54名、18年60名、19年90名、20年には200名に及んだ。寄宿舎や校舎の増築計画を立て、土地を購入した。こうして発展の兆しを感じられ出したのだが、明治20(1887)年3月、澤山は結核のために34歳の若さで永眠した。澤山の死後「祈りのカード」が発見された。それは幅3.2cm長さ6.5cmのカードで、上に1日から30日までの日付が書かれ、一日あたり6~10名の教会員や友人の名前が記されていた。病床にあって、会員一人一人のために父なる神に祈りを捧げていたのである。澤山の手の手が汚れがつき、黒くなって字が読めなくなっている箇所さえあったという。澤山の後任として校長に

就任した宮川経輝は、「彼の成功の秘訣は祈りの中にあったのである。」と記している。(7)

注

- (1) 『梅花学園九十年小史』12・13頁(明治初期、日本におけるプロテスタントは、公会主義といわれる超教派的教会成立に努力していたが、明治8年、公会主義は失敗に帰したため、梅本町公会、浪花公会も10年ごろから教会を名のった。)
- (2) 成瀬仁蔵『婦女子の職務』澤山保羅の序文(『梅花学園百十年史』54頁より)
- (3) 澤山保羅遺稿「主の為に尽すべき婦人の職分」(『梅花学園百十年史』54頁より)
- (4) 『梅花学園百十年史』55頁
- (5) 『梅花学園九十年小史』19頁
- (6) 『梅花学園九十年小史』35頁
- (7) 成瀬仁蔵『澤山保羅——現代日本のパウロ——』112頁(宮川経輝が『基督教新聞』に寄せた「澤山保羅の『祈りのカード』」より)

参考文献

『梅花学園九十年小史』

『梅花学園百十年史』

成瀬仁蔵『澤山保羅——現代日本のパウロ——』新井明訳 2001年刊

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(29):

『震災後の東京学校遊学案内 附・苦学生の

就職案内』(大正 13 年)(1)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号からは、啓文社より 1924(大正 13)年に刊行された『震災後の東京学校遊学案内 附・苦学生の就職案内』を見ていく。今号では、書誌的な情報と予備校の情報の一部を見ていく。

この進学案内書の編者は森山正雄であるが、詳細は不明である。筆者が確認し得た範囲で、森山が編者ないし著者のものは、この進学案内書の他に『高等学校・専門学校・官立学校入学受験指針』(大正 10 年)と『東京自活勉学法:苦学生と独学者の為に』(大正 14 年)がある。これらすべてが啓文社より刊行されているので、啓文社の社員ということも考えられるが、仮説の域を出ない。菅原亮芳『近代日本における学校選択情報:雑誌メディアは何を伝えたか』(学文社, 2013)にある進学案内書の一覧でも、上述のもの以上の情報は取れない。

本書は、「第一篇 総論」「第二篇 各種学校卒業者及独学者の進路(目次には独学校とあるが、本文では独学者となっている)」「第三篇 学校篇」「第四篇 苦学生の就職案内」という構成になっている。第二篇の表題にある「各種学校」とは、学校制度上の用語ではなく、中学校と高等女学校以外の中等教育レベルの学校という意味で使われている。また、「第三篇 学校篇」は、男子と女子に分けて掲載されている。

予備校に関する情報は、「第三篇 学校篇」に記述がある。具体的には、「第八類 外国語及国漢数学の学校」「第九類 高等予備校及予備校」である。紙幅の関係から、今号では「第八類 外国語及国漢数学の学校」に掲載された予備校に関する情報を見ていくことにする。

正則英語学校

【所在地】東京市神田区錦町三丁目二番地。

【目的】正則に英語を教授し完全に英語を活用するの士を養成す。

【学科】(午前部) 予備科、普通科、受験科(午後部) 受験科、高等受験科、臨時受験科。(夜学部) 予備科、普通科、受験科、文学科、教員養成科。

【入学期】毎学期の初(九月、一月、四月)とす、但し欠員あるときは臨時入学せしむ、七、八月には夏期講習会あり。

【入学資格】品行方正にして満十二歳以上の男子たることを要す。

【備考】正則予備学校は姉妹校にして同校入学に就ては入学金を要せず、両校兼修すれば中学の学力補修(ママ)となるべし。

国民英学会

【所在地】東京市神田区錦町三丁目十九番地。

【目的】専ら実用の英語と英文学とを教授す。

【学科】

初等科(午前並夜学) 普通科(午前並夜学) 中学科(午前並夜学) 受験科(午前午後並夜学) 高等受験科(午前並夜学) 英文学科(夜学) 会話専修科(夜学) 商業英語科(夜学)

欧文学院

【所在地】東京市神田区錦町三丁目十番地。

【目的】英語を教授するを目的とす。

【修業期間】学級を初等科、中等科、高等科とし各科毎月新設し四箇月を以て修了一年二箇月を以て全科を卒業せしむ。

【資格】初等科 初学者及中学科一、二年程度の補修(ママ)及入学準備

に適す。

中等科 中学三、四年程度にして受験準備又は同程度の補習又は修学者に適す高等科 諸官立学校入学受験準備及中学五年及卒業程度の補習又は修学者に適す。

英学専修学館

【所在地】東京市神田区仲猿楽町十七番地。

【目的】官、公私立諸学校に入学準備の予備又は日課の補習を為す者其他業務の余暇を以て修学せんと欲する者の為に英語を個人的に教授す。

【入学期】随時。

普及英語学校

【所在地】東京市神田区小川町一番地。

【目的】最新式教授法により時代の要求に応ずる英語並に数学を責任を以て最も短期間に完全に専修せしむ。

【学科】

英語 初歩英語 ABC より中学三年程度迄(四ヶ月)

(午前及 中等英語 中学三年程度ヨリ卒業迄(四ヶ月)

夜間) 試験英語 中学四、五年及卒業程度(四ヶ月)

数学 中学数学 初歩より中学四年程度迄(四ヶ月)

(午後) 試験数学 中学四、五年及卒業程度(四ヶ月)

日進英語学校

【所在地】東京市神田区中(ママ)猿楽町六番地。

【目的】英語数学を教授す。

【区分】英語部

午前部 初等科(中学一二年程度)

中等科(中学三四年程度)

上級科(中学上級及卒業程度)

受験科(中学五年及卒業程度)

午後部 特設初等科(中学一二年程度)

特設受験科(現に中学、高等予備校等に通学せる者の兼修に適す。

夜間部 入門科(ABC 程度)

初等科(中学一二年程度)

中等科(中学三四年程度)

高等科(中学上級及卒業程度)

数学部 高等受験数学科—午後授業(現に中学高等予備校等に通学せる学生の兼修に便す)

【修業期】各三箇月。

研修英語学校

【所在地】東京市神田区仲猿楽町十六。

【目的】英語を教授す。

学級 初等科、中等科、高等受験科の三種に分ち、各科共毎月初めに新設し三箇月を以て卒業せしむ。

三田英語学校

【所在地】東京市芝区三田四国町二番地。

【目的】何人にも必須なる英語数学を短日月間に完全に教授するにあり。

【学科】英語普通科は午前部と夜間部とありて一箇年間に中学全科の英語を授く。

英語受験科は午前授業、英語補習科は夜間授業にして、各三箇年(ママ)

なり、中学校卒業程度の者に適す

英語高等科は夜学にして中学校卒業程度の英語力ある者を入学せしめ修業年限を二箇年とす

数学科は夜学にして六箇月間に中学全科の数学を授く。

【入学期】学年は一月、四月、七月、十月に始まる、入学は学年始を原則とすれども欠員あるときは臨時入学するを得。

【入学資格】満十二年以上の男子。

独逸学館

【所在地】東京市神田区西小川町二丁目九番地。

【目的】独逸語を教授す。

【学科】高等受験科、普通（夜学）科、医書科、日曜独逸文法科に分る。

【入学】随時。

研数学館

【所在地】東京市神田区仲猿楽町。

【目的】数学を教授するにあり。

【学科】初等科、中等科、高等受験科の三科に分ち、各科は毎月始めに新設し、各三箇月を以て卒業せしむ。

三田英語学校の英語受験科、英語補習科は修業年限が 3 年とあるが、入学期の記述などをふまえれば、3 ヶ月の誤植であろう。

ところで、この本の各予備校に関する記述は、『一目瞭然東京遊学学校案内』とほぼ同じである（余談になるが、そのために入力作業は極めて容易だった）。目的や学科の記述は全くと言っていいほど同じである。所在地が項目立てされていること（当然のごとくそこにある情報が変わっているわけでも

ない)、「ヶ」が「箇」に変わっていること、末尾には原則的に句点を入れることの三点が異なっているが、何ら本質的ではない。森山の個人的な嗜好と評すべきところだろう。

本連載は予備校の情報を拾い出すことに主眼を置いているので、この点には深入りはしないものの、当時の進学案内書はそれで許されていたという点は興味深い。なお、情報の引き写しの可能性を示唆させる点は他にもあるのだが、次号で紹介する箇所になるので、それは改めて次号で指摘する。

次号では、「第九類 高等予備校及予備校」に掲載された予備校の情報を見ていく。

**七年制高等学校における尋常科・高等科間の教育の相違
：一学校空間での中等教育から高等教育への接続について
(4) 府立高等学校の事例③**

猿田^{さるた} 怜央^{れお} (早稲田大学教育学部)

1. 府立高等学校第二代校長・阿部宗孝について

1935年12月、府立高等学校初代校長川田正澂が死去すると、代わって翌1936年3月、府立第六中学校長の阿部宗孝が第二代校長に任命された(1)。

おもに中学校教諭、校長を歴任した阿部宗孝は、1921年初代校長に就任した府立第六中学校において明治天皇の御製斉唱や明治神宮参拝といった行事を導入し、『六中大家族主義』を唱道し、『師弟同行、寛容と融和』の校風の形成を目指すなど、「皇道主義思想」を前面に出した教育活動を行っていた(2)。たとえばそのうちの「六中大家族主義」は、「学校と父兄および同窓生と生徒とは、同心一体であり、家族であ」って、「国民の道」の精神である(3)とされ、阿部の国家観や道徳観がとくに表れている。

また「教育勅語を成るべく判り易く謹解して各家庭青少年に読ましめ青少年をして勅語の意味を謹解すると共に我が国体を弁知せしむる(4)」ことを目的とした教育勅語解説書では、阿部が題字と校閲を担っており、阿部はそうした業界や全国的な規模の団体とかかわりを持つ人物であった。

さて、1936年に府立高校長に就任した阿部のイメージを物語るものとして、回想・対談という形ではあるが、卒業生たちの証言(5)を引用してみたい。

佐藤●川田先生が亡くなって阿部宗孝さんが来て、一番初めに始まったのが明治天皇の御製なんですよ。

司会●ああ、そうか。

佐藤●阿部さんがリベラリストであったかどうか、ぼくは非常に疑問だと思えます。阿部先生が校長さんになられて、とたんになんだかとても窮屈な感じがしたように覚えていますね。

山下●阿部さんは一中じゃなくて六中（新宿高校）の校長でした。すでに「楠公会」の会長なんですよ。

司会●六中時代から。

山下●ええ、それがそのまま持ち込まれてきたんです。それで、阿部さんが校長になってから。日曜日の朝、明治神宮参拝というものをやりましたでしょう。

司会●ああ、やりましたね。

山下●それから朝礼やなんかが行われるようになった。阿部さんは一種の神秘主義なんですよ。「鐘が鳴るか槌木が鳴るか」というのが（笑）阿部さんの得意中の得意でね。そういう禅問答みたいなことしかいわない人なんですよ。だから、われわれのように知的なリベラルムードで育ってきたものには、初めちょっと通じないような話の校長さんだった。

古川●阿部校長とは卒業式の時がたった一度の出会いでしたが、なにかいかにも中学の校長という感じだったな。

山下●そうでしょう？

府立高校においても朝礼や御製斉唱、明治神宮参拝を導入した阿部は、それまで「リベラル」な川田を経験していた生徒たちにとって「いかにも中学の校長」、「神がかり的（6）」と記憶される存在であったことがわかる。

阿部は5年間の在職のすえ「府立高教授の『入試に洗職』」の責任をとって更迭されたのち、満州国吉林師道大学長に任命されて1941年に府立高校を去ることとなる（7）。

2. 府立高校『校友会雑誌』、『府高同窓会誌』にみる阿部宗孝

府立高校生に記憶されているように、阿部は中学在職時の「神がかり」的な教育方針を府立高校にも導入したようであるが、その具体的な影響や高等科と尋常科との差異といったものは筆者が用いた資料のなかに見受けられなかった。川田と同様に阿部は高等科の校友会雑誌には寄稿しておらず、尋常科のそれにも確認できるかぎりでは一度寄稿したのみである（以下、一部抜粋）。

余は老船長で、諸子は乗組員だ。両者の気分がぴつたりと揃はねばならぬ。呼吸が合はねばならぬ、自分は常にこれを念願し、実行したいと思つてゐる。明朗化合理化といふことは教へるものだけでなく、教へられる諸子もその気分でなければならぬ。気がついたことはどしどし言ふがまでも守らねばならぬ。子路が孔子に向つて、先生を世間では迂であると言つてゐるが、成程迂であると評すれば、孔子は由やお前は野であると言つて戒める。さうしてそこに何のわだかまりも無い。両方この気分でゆきたい。

(8)

ここでは比喻を用いて校長と生徒の一体化を説いているが、この程度の言説はことさらに阿部の「神がかり」を象徴するものといえないだろう。

他方同窓会誌では、次のように父兄会や同窓生に対する協力の呼びかけを行っている。

余は来任以来、只管川田先生の遺緒府高の是たる智徳体の併進を目標として進んで来た。将来も此の教育上の目標は動かすべくもないが、ただ智徳体三方面の何れにも十分なる成果が挙つてゐるとは言へないことを遺憾と

してゐる。設備も年を遂うて充実はしてゐるが、尚ほ生徒をして団体生活を味得させる為には、又団体訓練の成果を期待する為には寄宿舎建設の要もあろう、体位向上を図る為の特殊施設も必要である。此等の施設も近く実現したいと目下の努力を傾けてゐる。(9)

このように寄宿舎(他方で旧制高校的な「寮」なのかはわからない)建設の必要性を説くなど、課外活動や設備の拡充に積極的であったことがうかがえる。

阿部が府立高校に「神がかり的」な教育方針を導入したことは確かであるが、生徒活動への具体的な干渉についてはどのようにあったのだろうか。他資料との照合を行いながら検討していきたい。

(1)「公立中学校長兼公立中学校教諭阿部宗孝任命ノ件」、『任命裁可書・昭和十一年・任免卷十六』、請求番号任 B02054100、国立公文書館所蔵。

(2)東京都立教育研究所編『東京都教育史:通史編 三』東京都立教育研究所、1996年、115頁。

(3)太田正行編『府立六中の父阿部宗孝先生:東京都立新宿高等学校・府立第六中学校創立百周年記念誌別冊』東京都立新宿高等学校朝陽同窓会、2024年、5頁。

(4)教育勅語普及会編『教育勅語と我等の行道』教育勅語普及会、1935年、「編旨」頁。

(5)「府立を語る」、府立高等学校五十周年記念誌編纂委員会『府立高等学校五十周年記念誌』府立高等学校同窓会、1979年、36頁。

(6)小島英敏「府高時代あれこれ」、同上、87頁。

(7)太田正行、前掲、28頁。

(8) 阿部宗孝「余の念願」、府立高等学校校友会編『校友会雑誌』第6号、府立高等学校校友会第二部会、1936年、2-3頁。

(9) 阿部宗孝「同窓会員に寄す」、府高同窓会編『府高同窓会誌』第1号、府立高等学校同窓会、1939年、2頁。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2026年2月15日改訂)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

前号に引き続いて、2026年5月に公募された、d アニメストアの企画「愛せるおバカキャラ・シーン特集」で、私が投稿し幸いにもこのたび採択された、該当作品のキャラクターについて紹介します。『女子高生の無駄づかい』第7話での、生徒・山本美波（ヤマイ）、生徒・田中望（バカ）、養護教諭（シーキョン）について、「問題児な生徒のなかでも、とくにヤマイとバカは強烈なキャラだ。ヤマイが学校に持ち込んだガスマスクを、担任のワセダに没収されまいとしてバカに手渡す。バカは逃れながらも、なぜかそのガスマスクをかぶる。そして保健室に預け、ヤマイが受け取りに行くと、なぜかシーキョン先生がガスマスクをかぶっていた…。ワセダもなかなかユニークだが、シーキョン先生は厨二病のヤマイらに温かく接するだけでなく、彼女らの病んだ気持ちをリアルに等身大で共感できる存在だ。なんとも夢のあるステキな学校だね」（投稿コメント）と。（谷本）

<https://animestore.docomo.ne.jp/animestore/CP/CP00002143>

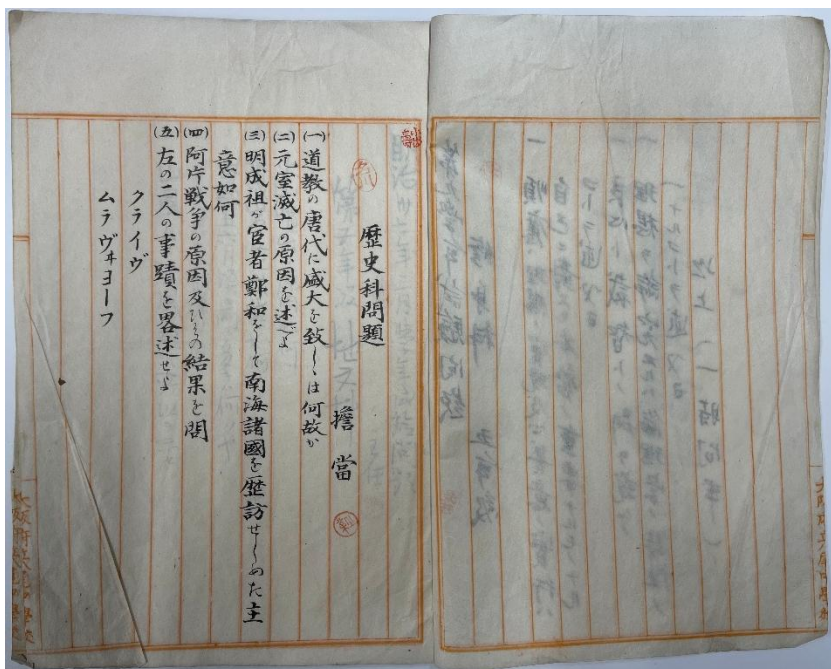
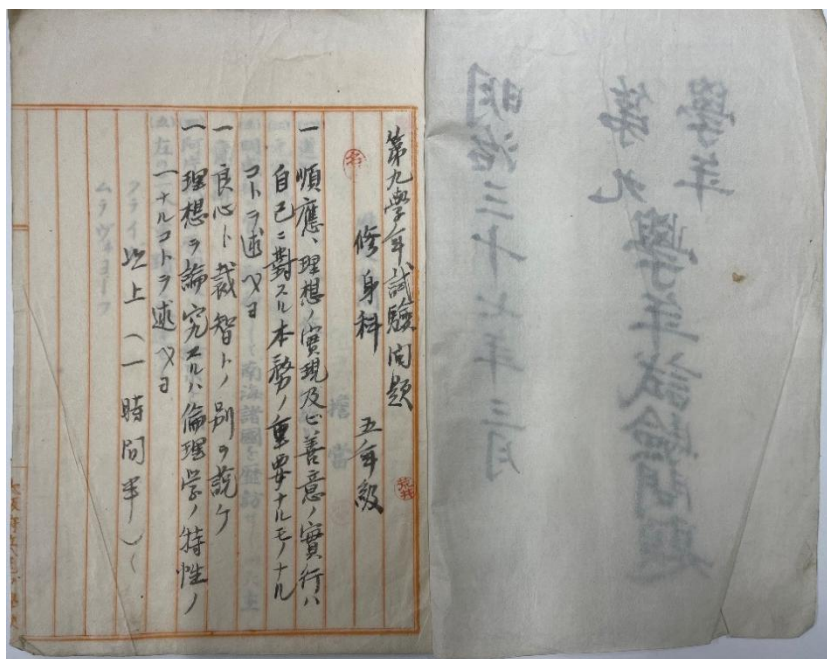
ある古書店から、明治期の大阪府の旧制中学校の史料について、連絡をいただきました。学校や市の図書館に連絡したところ買い取りに結びつかなかったということでした。

ということで、先日、大阪府八尾中学校の『明治三十七年 第九学年 学年試験問題』という和綴じの史料を入手しました（ちなみに 2 万円でした。妥当だと思います）。当面は富岡研究室に保存し、近大退職までにはどこかの図書館などに寄贈しようと考えています。

八尾中学校は、1895年（明治28）に、大阪府第三尋常中学校として設立されたので、「第九学年」というのは、創立から9年目つまりの1904年（明治37）に該当しそうです。

以下、部分撮影した写真を添付します。小出寿之太校長のものと見られる認印も押されているので、当時実在していた史料だと思われます。各科目・各学年の試験問題が八尾中学校の罫紙に清書されて、糸綴じ製版されているうえ、校長などの認印が押されていますので、学校の正式文書であったと見てよいと考えます。各地で保存されている他の旧制中学校史料と比較すれば、何か研究できそうです。

学校や教育委員会から連絡があれば、学校等へ寄贈する気持ちはあります。こうしたケースについて何かご存じの方は、ぜひご教示ください。（富岡）



会員消息

今号でも紹介した文献資料の入手元である、ネット古書店の泰成堂書店さん（武蔵野市）から、実はその他にも最近、昭和初期に第三高等学校で実際に使用されていた自然科学系の教科書4点を、5千円ほどで幸い入手することができました。旧制高等学校で使用されていた教科書については、私自身明治期のものは手にしていたのですが、今回は随所書き込みされている、昭和初期の実物を手にして、個人的にもうれしくて興奮しました。その喜びを、無邪気に友人の富岡勝さんや田中さと子さんらにも少し自慢気に語ってしまうほどでした。富岡さん・田中さん、いい歳をしていながら、まだまだ子どもの精神でもって燥ぎ、いつもながらにご迷惑をおかけして申しわけありませんでした。（谷本）

学業の方が忙しくなり、大変ご無沙汰になってしまいました。

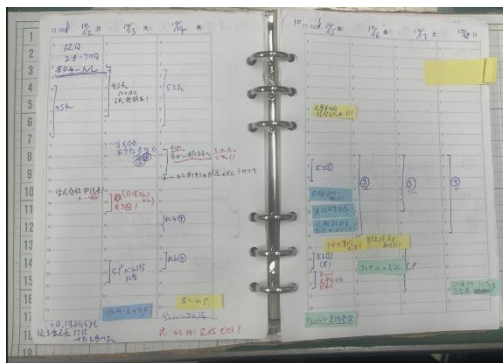
8月の末に松本の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーに参加させていただきました。大変おおくの学びを得ることができ、とても充実した2日間でした。現在は資料調査と併せて、七年制高等学校長会議に関する資料に目を通しています。（猿田）

旧制福岡高校から新制東京大学に入学した英文学者・演劇評論家の小田島雄志氏の『半自伝このままでいいのか、いけないのか』（2026年、白水社）には、1949年当時の東大英文学科の様子が描かれています。そのころの先生の何人かは、雨の日は休講だったようで、斎藤栄治先生は、傘をもっていなかったようです。新制大学の準備ができていなかったため、1949年の入学試験は、6月8日、9日、10日に行われたようです。6月23日に合格発表があり、7月7日の入学式で、南原繁総長、矢内原忠雄教養学部長の訓辞、本格的な授業は9月から始まり、ドイツ語の竹山道雄先生は、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』がテキスト…、新制大学開始の頃の様子がとても興味深かったです。（山本剛）

前号に続き、連載記事を書けず大変申し訳ありません。研究休暇後の久しぶりの授業の準備でばたばたしていたのと、10月4日の合唱の演奏会出演などで気がついたら時間が経過していました。連載で扱っている嘉納治五郎の「精力善用」に見習って、もう少し規則正しい生活をしようと思います。

そのように思い、趣味のノートづくりの延長で、紙のスケジュール帳をつくってみました（手書きのほうが覚えやすく、考えやすいため）。持ち運びのしやすさと記録面積や拡張性のバランスを考えてB6サイズ（182mm×128mm）に自分でカットした紙に、24時間記録可能なバーチカルタイプの見開き1週間のスケジュールの書式を印刷し、「バイブルサイズ」のシステム手帳用金具を購入して綴じ、自作の簡単な表紙をつけました。これで予定とともに就寝・起床時刻を楽しく記録しています。B6は「京大式情報カード」のサイズなので、情報カードも筆記できます！

こんな趣味に使った時間をもう少し執筆に回せばニューズレターの原稿も書けたと思いますが……。



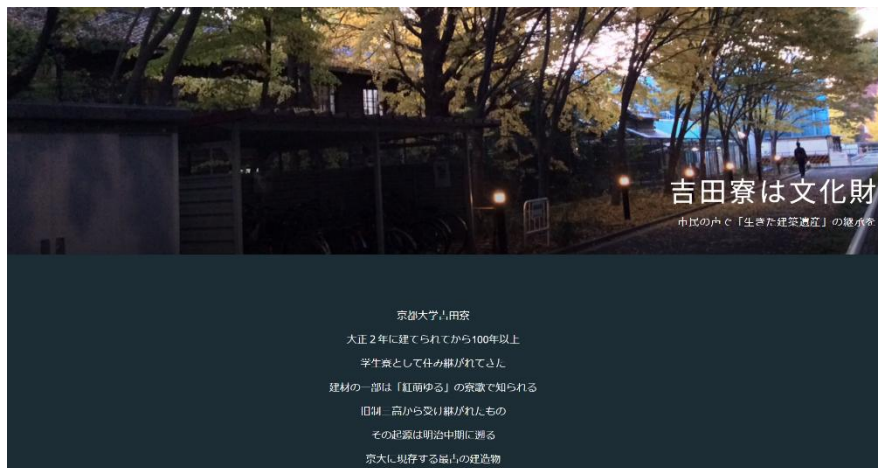
前号でも少しご紹介した、1913年築の京大吉田寮現棟を登録有形文化財に登録して、現用の寮つまり「生きた文化財」として活用しつづけていくことを求める市民の会の署名を、まだ集めています。

もしご関心をもってくださいの方がいらっしゃいましたら、以下からご検討ください。

市民の会Webサイト「吉田寮は文化財 市民の声で「生きた建築遺産」の継承を」

<https://konoe.localinfo.jp/>

（富岡）



本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。